

幼稚園教育実習生の評価に関する定性的研究

—「笑顔」の保育者的意味とは—

永 易 直 子*
NAGAYASU Naoko

要 旨

幼稚園教育における「実習後の課題」に対する取り組みは、実習生自身に委ねられていることが多い。しかし、高等教育機関における保育者養成という観点からは、実習園を抜きに考えることはできない。それに関わらず、これまでの保育者養成機関のカリキュラムにおいて、実習園で実習生の指導に当たった現職の幼稚園教諭の意見が反映されてきたとは言い難い。

そこで、本研究では、実習生の実習指導に関わった幼稚園教諭に着目し、実習指導者の実習生に対する評価である実習評価表の記述から実習生の実習後の課題を見つけ出すことを試みた。

また、実際の幼児教育現場に赴いて見習いの幼稚園教諭として「子どもたちの前に立つ」ことが、実習生にとって大きな緊張や疲労を伴うため、本来の技能や態度が軽減する傾向が見られたが、この緊張や疲労の状況からどのように「本来の自分へと立ち直る」かを、現場の先生方と、そこへ導こうとしている実習生と指導教員との関わりのなかで「笑顔」の保育者的意味を明らかにすることにした。

キーワード：笑顔、幼稚園教育実習、実習評価

1. 研究の目的

幼稚園教諭免許状の取得を目指す学生にとって、実際の幼稚園に赴き、大学で学んだことを実践に活かしながら現職の教諭から指導を受ける「幼稚園教育実習」は、大きな学びの機会となる。しかし、これまで、実習後の課題とは何か、という取り組みは、実習生自身に委ねられていることが多かった。そのため、近年、必修科目となった「教職実践演習」では、実習後の課題解決に向けた取り組みが演習形式で行われるようになった。

しかしながら、教育実習生一人ひとりに固有の課題があるならば、それを適切に把握し、課題への取り組みを促すものでなければ演習の効果は激減する。よって、教職実践演習の指導法には、教育実習生一人ひとりの固有の課題を把握する方法がなければならないだろう。

そこで重要な視点を提供するのが、教育実習生に対する評価を持った実習園での幼稚園教諭の存在である。幼児教育現場では、個々の教師の個性が教育者の個性として認められて、初めて共同的な教育実践の中に組み込まれていく。つまり、教育実習生の課題は、共同的な教育実践を行う場合に欠けているものや不十分な知識や技能である場合が多いのである。したがって、教育実習生の課題を幼児教育現場の教師の視点から浮き彫りにすることが重要だと考える。そのために、実習園での指導者の

教育実習生に対する「ことば」を手掛かりとする。なぜなら、幼稚園での実習指導者は、これまでの自身の経験を踏まえ、教育実習生がこれから取り組むべき課題を理解し、それを教育実習生に幼児教育現場の言葉（ことば）で伝えているからである。

「笑顔」の保育者的意味について上月（2011）は、実習の評価総合所見欄の中に記述されていた「笑顔」「明るさ」「元気さ」など明朗な表情や態度に関するコメントを分析し、保育者のイメージは世間一般で抱かれているものではなく保育職に従事している者の中にもそのような態度を表出することが必要である、と知っている者が多いと読み取ることができる。

本研究の目的は、実習園の実習指導者（幼稚園教諭）のことばに沈殿している多様な意味を発見し、この「新たなことば」の意味から教育実習生の課題を浮き彫りにすることである。

2. 研究の方法

本研究では、定性的手法^(注1)を用いて実習生の課題を実習園の幼稚園教諭の視点から浮き彫りにするために、実習園での実習指導者（以下、実習指導者と表記する）による実習評価表の「総合評価」の記述を、「実習生に関するテキスト」とした。

*大和大学 教育学部教育学科（初等幼児教育専攻）

定性的研究とは、ある対象に関する「考え方」や「理解」などの人々の認識を言葉で表現したものの。

具体的には、教育実習生 38 名を「事例」に、実習指導者による 38 名分の評価を「コード（テキスト）」に置き換えた。

定性的コーディングは、佐藤郁哉氏の質的研究法を参考に、①テキストをセグメント化^(注2)した後、川喜田二郎氏の K J 法を用いて、②ラベル拡張^(注3)、③ラベル集めを行い^(注4)、④ラベルのグループ編成^(注5)・集約的コーディング^(注6)によってテキストを分類して、概念コードを抽出した。

3. 研究内容（事例研究）

本事例は、大阪府内にある O 短期大学保育学科 38 名の幼稚園実習Ⅱの実習評価表における実習指導者の「総合評価」（実習生への評価）に記述された文章を定性的コーディングの手法を用いて分析した。

コーディングの結果では、以下の四つの概念が抽出された。つまり、実習指導者は実習生を、①「意欲」、②「責任感」、③「礼儀作法」、④「保育技能」の四つの大きな概念で把握していることがわかった。

①「意欲」では、「課題を持って取り組む」、「自ら進んで活動していた」などの肯定的な評価と「自ら学ぶ姿勢がない」、「意欲が感じられなかった」などの否定的な評価の記述が見られた。

②「責任感」では、「責任を持って取り組むことができた」、「体調管理の不十分さや自ら進んで行動できない」、「子どもの安全について配慮ができなかった」などの記述が見られた。

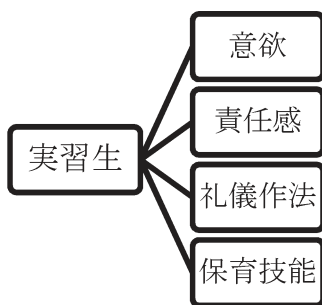


図 1 実習指導者の評価による四つの概念カテゴリー

③「礼儀作法」では、「挨拶」や「礼儀正しい」といった記述が多かったが、「返事や挨拶ができない」、「身だしなみが悪く靴のかかとを踏んでいた」などの否定的な評価も散見された。

④保育技能では、設定保育に必要な「ピアノ」、「絵本の読み聞かせ」、「手遊び」、「製作」、「指導案作成」などの基本的な保育技術に関する記述が見られた。例えば、「ピアノの上達が見られた」、「毎日絵本を持参

していた」、「子ども達の反応を上手く引き出せることができた」などの肯定的評価や「ピアノの練習不足」、「時間内に取まらない」、「スムーズに進まない」などの否定的評価が見られた。

最後に、特殊な事例については、一生懸命に取り組む姿は実習指導者には伝わっていたが、「一つの事が気になると周りが見られない状況」になり、「勝手に思い込み行動をしてしまうことが多く、指導者とは違う視点で子どもたちにかかわり指摘されると落ち込んでしまい、指導者自身も実習生に言葉かけに気を使った」という評価（事例）があった。

4. 考察

実習生の「意欲」は、肯定的・否定的な側面を含めて四つの概念の中で一番多く散見された概念である。印象的なことばとしては、指導者である幼稚園教諭が、教育実習生の実習に対する真摯な取り組みを見て「実習生の一生懸命な姿に学ぶところがありました」という記述があった。これは、実習指導者と教育実習生の関係が、「指導者→実習生」という一方的なものではなく、「指導者⇄実習生」という双方向的な関係であることを示していると考えられる。

よって、教育実習生は、「受動的」な態度や行動だけでなく、「自分らしさ」を持って実習に臨む必要がある。

また、保育技能でのピアノや手遊びの練習不足が指摘された後でも、実習中に練習し、上達することも見られたことから、教育実習生がどのような意欲を持って、教育実習に臨むか、ということが重要であると言えよう。

本事例での特徴的なことばとして「笑顔」がある。ここでの「笑顔」とは、おもしろい状況で笑うことでも、職務的な接客サービス技術として微笑むことでもなく、子どもと深く関わっていること表情（状態）に他ならない。例えば、「毎日笑顔を絶やさず頑張っていました」、「いつも笑顔で、子ども目線で向き合ってくれて」、「いつも笑顔で子どもたちと接していただき」、「笑顔と優しさを与えてくださいました」、「子どもと接することで柔らかくなってこられ笑顔もよく見られました」などである。このことから、幼稚園教諭と園児との関係は、笑顔が基本的な関係であり、実習生の表情に笑顔が見られない時は、子ども達との交流がうまくいっていないことが考えられる。

幼稚園教諭としての意欲・責任感・礼儀作法のいずれも持ち合わせていなかった特殊な事例では、「責任感の無さに失望しました」、「体調管理の不十分さにより実習が大幅にずれ込み」、「社会人として働くことの自覚を持つことが必要」、「指導者の注意や助言に対して素直に聞き入れることができておらず」などの記述があった。一見すると、保育者の基本的能力に欠ける実習生として映

るが、先述した指導者と実習生の双方向性が作用しており、実習指導者は、実習生に対して、理解できると思った「声かけ」が伝わらず、声かけに注意するようになった。

ここには、幼児教育現場で使用される日常語に慣れてしまった幼稚園教諭の習慣化が見え隠れする。多くの教育実習生が、幼児教育の日常語を正しく解釈することができるのは、言葉の解釈の基盤を有しているからであり、純粋な言葉の意味だけでは日常語は機能しない。言葉は、意味だけでは伝わらず、解釈の基盤がなければならぬことを気づかせてくれる事例である。

5. まとめと課題

高等教育機関における保育者養成という課題は、実習園を抜きに考えることはできない。それにも関わらず、これまでの保育者養成機関のカリキュラムにおいて、実習園で実習生の指導に当たった現職の幼稚園教諭の意見が反映されてきたとは言い難い。

本研究では、実習生の実習指導に関わった幼稚園教諭に着目し、実習指導者の実習生に対する評価である実習評価表の記述から実習生の実習後の課題を見出すことを試みた。

今回の定性的研究で明らかになったことは、実際の幼児教育現場に赴いて見習いの幼稚園教諭として「子どもたちの前に立つ」ことが実習生にとって、大きな緊張や疲労を伴うため、本来の技能や態度が軽減する傾向が見られたが、この緊張や疲労の状況からどのように「本来の自分へと立ち直る」かを、現場の幼稚園教諭の先生方が期待し、そこへ導こうとしている実習生との関わり状況である。

事例では、「本来の自分へと立ち直る」ことを「自ら」という第一人称の代名詞を用いて表現されていた。例えば、「園児への声掛けなども自ら進んで行えるようになる」、「自ら積極的に学ぼうとする姿」、「保育の流れをつかみ自ら行動しようとする姿がよく見られた」などである。そして、「本来の自分へと立ち直る」ことができない実習生を、「色々な事を学び取ろうとする姿勢があれば良い」、「努力する姿勢を身に着けて欲しい」、「積極的に子どもたちと関わって欲しい」というように表現されていた。

自ら進んで実習に取り組む姿には、「笑顔」が見られる。しかし、この笑顔は、「いつも」、「毎日」、「絶やさず」でなければならない。そして、子どもと接する時、子どもと接しているうちに、笑顔になっていく。このように、実習指導者が実習生の「笑顔」を捉えているのは、笑顔が幼児教育の実践にとって重要な意味を持っているからに他ならない。事例では、「子どもと接することで」笑顔になっていったことが記述されていた。

これは、子どもとの交流の中で、私たち大人を笑顔に

させる「なにか」があるからに他ならない。

当初は、人生で初めての教育実習で、実際の幼稚園で多くの実習内容を実践しなければならない教育実習生の内面は、物理的な多忙さによる疲労感や精神的な緊張感で、強張った顔をしているに違いない。

このような心情の中で、子どもの達から「せんせい！」と呼ばれ、「あそぼ～」と誘われる状況は、一瞬でも社会や学校から解放され、無邪気に子ども達との遊びの中に入っていき内に自然と笑顔になることは想像することができる。ここに、子ども達と教育実習生との関係性から「笑顔」の意味が解釈される。

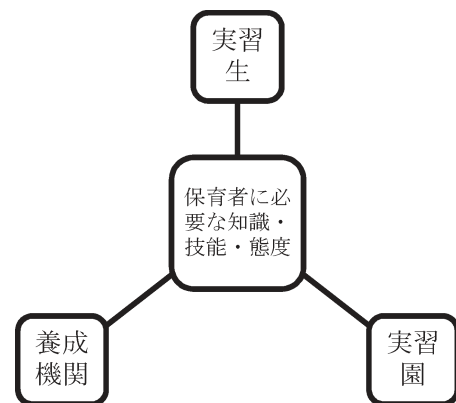


図2 保育者養成に関わるトライアングレーション

定性的研究では、「保育者に必要な知識・技能・態度」を育成するという保育者養成の取り組みについて、①実習生、②実習園（実習指導者）、③養成校（実習担当指導者）の三つの視点から捉えることを「トライアングレーション（方法論的複眼）」と言う。

今後の課題としては、①実習生、②実習園（実習指導者）、③養成校（実習担当指導者）の三つの視点から保育者に必要な知識・技能・態度などを捉える質的調査・研究を行い、保育者の育成を包括的に進める方途を模索する手掛かりとしたい。

注1

ある対象に関する「考え方」や「理解」などの人々の認識を言葉で表現したもの。言葉は定性的(質的)なデータである。ある対象に対する人間の認識(理

解)に関する表出は、様々な仕方で収集することができる。例えば、参与観察によって、その対象に対してどのように関わっているか、関わっている際の「行動」や「言説」を記録し、質的データとすることや、その対象に対してある人物が考えたこと思ったことを記述した日記やレポートなどの「文章」(ドキュメント)を定性的データとみなす方法である。

注 2

コードやもとの文脈に関する情報をつけて切り抜かれた文書資料の一部のことをセグメントと呼ぶ。また、オリジナルの資料の文脈から切り出されることを『セグメント化』という

注 3

定性的コーディングにはじまる質的データ分析の準備段階として、原材料となる文章資料を一定の方針に基づきファイリングする必要がある、分類と配列の2つである。

注 4

『似たもの集め』の要領で資料やデータをいくつかのグループにまとめていく作業を指す。

注 5

資料やデータを何らかの一定基準によって並べていくことを指す。

注 6

比較的少数の概念カテゴリーに対応するコードを選択的に割り振っていきまたそれらの概念同士の関係について明らかにすること

参考文献

1. 2011年 上月智晴 『保育における感情労働—保育者の専門性を考える視点として』 北大路書房
2. 佐藤郁哉 『質的データ分析法』 新曜社, 2003年, 46頁
3. 川喜田二郎 『K J法—渾沌をして語らしめる』 中央公論社, 1986年, 125頁
4. 同上, 127頁
5. 同上, 130頁
6. 上掲書, 2003年, 99 - 104頁

謝辞

本研究にご協力くださった実習園の諸先生方、実習生の皆様に記して御礼申し上げます。また本研究を行うにあたり、ご指導くださいました崎浜聡先生に心より感謝申し上げます。